

企業を訪ねて 17

北越メタル株式会社

■「鉄にいのち 人に未来 ～地域循環型社会構築の一翼を担って～」

令和3年2月3日、長岡市の北越メタル株式会社代表取締役社長の棚橋章氏をお訪ねし、事業の取り組みや今後の展開に懸ける思いについて伺いました。



棚橋 章 代表取締役社長

聞き手：古口日出男 副学長（地域産学交流センター長）

◆日頃は本学の教育研究に対しご支援を賜り、謹んでお礼申し上げます。はじめに、貴社の理念やものづくりへの想いについてお聞かせいただければと思います。

◇当社グループの理念は、「企業の存続と発展を通じて、広く社会の公器としての責務を果たし、内外の信頼を得る」です。そして、生業として、市中の鉄スクラップを回収し、電炉で溶解、精錬後、ビレット（鋼塊）に铸造、熱間圧延し、鉄筋をはじめとする様々な鋼材製品を製造しています。鋼材そのものは、ビルなどの基礎、柱、梁などに使用され、一般にはコンクリートや壁材に覆われ目立たないのですが、構造物そのものを支える非常に重要な部材です。また、生産した鋼材を現場で使いやすい鉄鋼二次製品として、開発、加工し、現場の方々の作業改善、安全、労力軽減に資する製品を、理念にある「社会の公器」としてお届けしていると自負しています。ここで言う「社会の公器」とは「社会的責任を果たす」ということであり、それは「自社の製品やサービスが生活の向上に資すること」と認識しています。また、理念の「責務を果たして内外の信頼を得る」とは、お客様をはじめ、全てのステークホルダーの方々から信頼していただくことと考えています。また、内外の「外」とは品質や納期等のお客様からのニーズに応えることであり、「内」とは社員にとっても信頼を裏切らない会社であるとともに、社員が誇りを持てる会社になることと考えています。

当社は、お伝えしたとおり鉄鉱石ではなく、鉄スクラップのリサイクルにより鉄鋼製品を製造しています。単にスクラップと言っても、ゴムやプラスチック、鉄以外の非鉄（銅、アルミ）が混入しているものを、ノウハウにより、品質ごとに選別します。それらをブレンド（配合）して、溶かして初めてわかる成分に基づき、添加元素などで調整し、お客様の要求品質の鋼材を製鋼します。この工程が、まさに一旦役目を終えた鉄にいのちを吹き込むプロセスの醍醐味であると思っています。

◆本学との交流への思いと期待することについて

◇私達は、地域循環型社会構築の一翼を担うことで、社会の公器としての役割を果たしています。しかしながら、一方で製鉄プロセス、とりわけアーク炉（電気炉の一種）の製鋼プロセスでは、多くの電力や炭材を使用し、多量の二酸化炭素を排出しています。そこで、2050年二酸化炭素排出実質ゼロにむけて、現在は省エネ主体の取組に注力していますが、大きな生産プロセス改革を進めなければならないと考えています。また、製鉄業では鉄鋼生産プロセスを「動脈」、電気炉で発生するガストやスラグ等の処理、有効利用は「静脈」と言われています。ガスト等の多くは活用されていますが、まだ埋め立て処理となっている物も一部ありますので、ゼロエミッション化に向けた研究開発も重要な課題です。また、社会のニーズも刻々と変化しており、高級スクラップ（不純物の低い物）は輸出され、当社が扱うスクラップの品位低下が予想されます。これらの含有不純物の無害化処理や選別やブレンドにおける効率的な生産の技術開発も重要なテーマとなっています。さらに、当社の鋼材を使用いただいている建築、土木現場での困り事のソリューション提供には、解決策を考え、それに具現化（製品開発）する技術的アプローチが必要になります。これら種々のテーマについて、いきなり解決に至らないと思いますが、大学と交流を深めることにより、解決策へのヒントが見つかることを期待しています。

◆これから社会に出る若者や本学に期待することはどのようなことでしょうか。

◇当社にも多くの技術スタッフがおりますが、大学で学んだ専門がストレートに活かされている人は、それほど多くありません。一から勉強しながら会社の業務にあたってもらっています。そのような状況を踏まえ、入社式では、「自分を高め、自分に投資してください」とお願いしています。ここで言う投資とは、お金を使う事だけではなく、時間を使う意味であり、若い人には一生勉強だと伝えています。また、技術系、文系を問わず、「改善力を身に付けてほしい」とも申し上げています。そのためには、現状に満足しない事、傾聴力を高め、人から学ぶコミュニケーション力を養ってほしいと伝えています。それらの力を養う事で、教科書がなくとも、社内外の様々な専門スタッフから吸収できるノウハウ、情報から、未知の分野における解決がなされると思っています。最後に私事ですが、40年前に会社に入社した時、昼間しか働いていない自分は、夜勤の作業者に対し後ろめたい感を持っていました。その時の先輩から「夜勤の業務をする人に引け目を感じる必要はない。自分達は現場の人達の負担をどうやったら軽減できるかを考えることが役目である」と言われました。その後、色々な改善の成果が上げられ、現場から感謝された時に初めて実感しました。若いスタッフには自分が組織で果たすべき役割を自分で考え、感じ、それを実行してほしいと思っています。

◆大変貴重なお話を伺うことができました。今後も本学との連携事業でご支援いただきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。